

手記『轍の跡』より

前島 敏夫 著

● 登場人物

私…前島敏夫
兄…前嶋岩夫
父…前嶋武次郎
母…前嶋ふじ
姉…前嶋（藤田）芳枝

※ 昭和初期～戦中の暮らしと前嶋岩夫の動向などについて抜粋しました。

私がこの世に現れたのは昭和4年（1929年）1月5日と戸籍謄本には記載されているが、「臍の緒書き」を見ると昭和3年11月8日になっている。理由はよくわからないが当時の風習として早生まれにした方が有利だとの判断もあったようである。

幼い時の記憶は、最早鮮明には残っていない。走馬燈のように断片的に見えるのみである。幼い頃は1年経つのもとても長く感じ、特にそれが辛い事や悲しい事と重なっていると、本当に一日千秋の思いである。だが年を取ると共に時間が勝手に転がって行き、十年一日の無情の夢になってしまう。

当時わが家は洋服の仕立業をかなり手広く営み、奉公人も5～6人いた。

静岡は地震の多い所でもある。その中でも生まれて始めて経験し、しかも一番強い上下動の地震は昭和8～9年頃にあった。

その時、私は店の奉公人達に頼まれて、近所の一文菓子屋へ飴玉を買いに行こうと、上がりかまちに腰を掛けて靴を履いていた。

突然、何か遠くで唸るような音が聞こえ始めたと思ったら、急にがらがらと家中が鳴り出し、上を見たら天井が激しく踊っていた。私は何が何やらまったくわからず茫然としていたら、父がいきなり私の体を抱き上げて、前の電車道に飛び出した。近所の人々も一斉に飛び出して電車道には多くの人が溢れ出していた。その時静岡駅行きの電車が何時ものように大きな音を立てて走って来た。それに気がついた父は「止まれ！ 止まれ！」と大きな声をあげて、手を振り電車を止めた。その時の地震で、線路が曲がってしまったので、そのまま2日ぐらい電車は立ち往生してしまった。後で皆が話しているのを聞いたら、その時の震源地は久能山の地下で、東照宮のある久能山と日本平の間の山が半分ほど陥没して、切り立った崖が新しく出来てアメリカの大峡谷のような眺めになってしまった。被害は静岡が中心で、熊高橋交番前の駿府城外堀の石垣が一部崩れ落ちていたり、一部地域で地割れが生じたりしたが、家屋の倒壊は久能地区のみであった。直下型地震は激しい上下動でコンクリート製の建物にとっては、特に恐ろしいものだ。

幼児の頃の生活は今考えると戦争もなく至極平和で、昼間は紙芝居で黄金バットに夢中になり、夕方には近所の子供達と一緒に周圀が暗くなるまで「花いちもんめ」などの遊技をして遊んだ。お小遣いは、私の場合で1日1銭程度だったが、近所の一文菓子屋で夏はかき氷、冬は焼き芋やおでん、時にはゆで小豆など、色々な物を買って食べていた。

昭和12年になると、今まで平和の最中にあった世の中が急に慌ただしくなり、戦争の陰が日一日と迫ってきた。7月7日の中国、当時は支那と呼んでいたが、ここでの有名な「盧溝橋事件」は瞬く間に日本全土の戦争意識をかき立てた。

町ではカフェやダンスホールは閉鎖され、流行歌も聞かれなくなり軍歌一色になった。その上、連日のように静岡連隊からは数多くの兵士が戦場に向かって出発し、それを送る人々の群れで町中は大騒ぎだった。母方の叔父の留ちゃんも結婚して間もなくだったが召集された。しかし、静岡連隊の中が満員のため、市内の一般民家に分散して宿泊することとなり、必要な軍事訓練は町の中で行われた。留ちゃんは偶々同じ両替町5丁目の魚問屋に宿泊することになったので、家中で毎日のように夜になると訪ねて行った。

だが、それも10日ほどで、皆の万歳の声に送られて、8月の半ばの夕方静岡駅を出発した。この頃は朝・昼・晩と1日3回各1連隊が支那に向けて出発した。人数は1回が約2千人だった。留ちゃんの奥さんのすえちゃんは、普段は活発に立ち回りの夫婦喧嘩をしていたのに、この時だけは一日中涙を流しながら見

送っていた。

それから約1ヶ月後、留ちゃんは支那軍の攻撃が激しいので、最初2～3日はなかなか上陸出来なかったが、やっとのことで上海に上陸し、敵と激しく戦いながら南京に向かう途中、金家湾で敵に足を撃たれてぼったりと倒れた。隣にいた戦友がただちに駆け寄って「大丈夫か」と声を掛け衛生兵を呼んだ。留ちゃんは手をついて、やおら立ち上がろうとしたが、その時、敵の弾が顎の下から頭を貫き、留ちゃんは「ウーン」と言ってこと切れた。戦友もその時、足に敵の弾を受けたが、後退して衛生兵の助けで一命を拾って内地に帰還する事が出来た。そして、この時の状況を報告してくれた。それから暫くして、今度は田町の山田の叔父さんが応招して中国大陆に出征した。叔父さんの家はすでに3人も子供が居て、歳も30を越して居たが、留ちゃんの仇討ちだと言って元気に出発した。叔母さんはしょんぼりと悲しそうだった。幸い1年位で叔父さんは無事に帰還した。帰還祝いに親戚の者達が田町の家に寄り集まって、色々と戦地の話を聞いた。

叔父さんの話によると、南京は陥落した直後なので、直接の激しい戦闘には会わなかったが、敵のゲリラ活動には常に悩まされた。ある夜のことで、命ぜられて歩哨をしていた時の事だった。何か前方にうごめく人影が見えたので銃を構えて「誰か!」と言った。すると、その人影はすっと立ち上がって、こちらに向かって歩いて来た。よく見ると、武器は持っていないが大きな身体をした敵の兵隊だった。叔父さんは恐かったが、そのままでは自分が殺されると思い、直ちに銃剣で敵兵の胸をめがけて突き刺した。悲鳴をあげた敵兵は恐ろしい顔をして、その銃剣を手で握り締めたから叔父さんはますます恐くなって、小銃の引き金をひいて「ズドン!」と相手の胸に弾を撃ち込んだ。敵兵はそれでも倒れないので、今度は軍靴で敵兵の股間を思いきり蹴飛ばした。敵兵は力尽きてやっとの事でぼったりと倒れた。叔父さんの経験の中で、この時が一番恐かったと言った。そしてさらに皆を驚かせたのは、南京における日本軍の中国人に対する行為だった。叔父さん達の軍隊が南京へ着いたのは、占領後暫くしてからだったので、特に残酷な部分は先発隊の行為として記録に残っていたり、写真で見たりしたのだが、まだゲリラ行為は続いており、一部ではその報復として、それらしい中国人を捕らえて処刑していた。

叔父さんはその処刑の場面や、先発隊が多くの支那人市民を殺害して、山になっている死骸の写真を、皆に説明しながら見せてくれた。これが後で問題になった南京虐殺事件だった。叔父さん達は単独行動を極力避けていたが、兵隊の中には若い中国人の女性に声を掛けられて、喜んで後をついて行き、そのまま行方知れずになった者も多かったとのことだった。

このような世の中では洋服を作る人も次第に少なくなり、家の商売も完全に行き詰まってしまった。昭和12年の暮れにはどうにも動きがとれなくなり、全ての商売をやめることとし、工業学校の電気科4年生の兄は、学校を中退させられて葵町の「青萬電機商会」に住み込みで奉公に出された。

昭和14年、兄が「青萬電機商会」を辞めて家に帰って来た。帰って来た兄は、職業紹介所に赴いて次の仕事を探した。兄の希望は「工業学校中退ではたいして良い所には就職できないから、軍属を志願して大陸で働きたい。そうすれば上手く行けば工業学校卒業の資格で採用されるかも知れない。以前から満州に行って馬賊として活躍するのが夢だった。」と言っていた。そしてしばらくの間、昼は私を連れて近くの小川で小魚や泥鰌等を大きな網ですくい取ったり、友達の家を訪ねたりして毎日を過ごしていたが、ある日、出頭通知があったので軍関係の事務所に行き、試験を受けた所、幸いただちに工業学校卒業の資格で軍属に採用された。身分は文官（下士官待遇）で、赴任先は希望通り満州の新京の関東軍第100部隊だった。兄はさっそく身支度を済ませて、意気揚々と私達家族の見送りを受けて出発した。そして敦賀から気比丸に乗って北朝鮮に行き、そこから満州に入った。

昭和15年、この年は時局の推移が戦争に向かっていくためか、小学校の制度が今年で最後になり、来年からは国民学校になることとなった。昭和16年3月、通い慣れた城内東尋常小学校を卒業する時がやってきた。この東小学校は昭和20年6月、アメリカのB29爆撃機による静岡の焼夷弾爆撃により完全に焼失し、廃校になった。しかし、それから10年くらいの後に葵小学校として再建された。

昭和16年4月、私は家から比較的近い、徒歩10分ほどの距離にある静岡県立静岡工業学校の電気科へ入学した。富士山の形を3つ組み合わせた校章の付いた黒い学帽を被り、国防色の長ズボンの服を着て、当時、物が不足し始めていたので、牛革でなく豚の皮で作った編上げの靴を履き、ランドセルでなく肩に掛けるズック製の長靴を提げて、学校に通い始めた。

この年の秋、満州で徴兵検査を受け甲種合格になった兄は、豊橋の工兵部隊へ入隊するために、静岡へ帰ってきた。兄は厚い将校用のマントを身につけ、軍刀を腰に下げ、乗馬用の拍車の付いた黒い長皮靴を履いて、さっそうと帰ってきた。背丈も5尺5寸（約165cm）以上あり、がっちりした体格の兄のその姿は、周囲の視線を集めて光り輝いていた。

兄は私に工業学校を卒業したら、さらに勉学して上の高等工業学校へ行くように勧めた。兄の経験では、どこへ勤めるにしても学歴があるとないとでは、最初から大きな違いがあると言うのだった。

また兄は満州で得た経験から、今後について次のように語った。

「敏夫はノモンハン事件の事をどのくらい知っている？」

「新聞では、ソ連がノモンハンに侵略して来たので日本軍がこれを迎え撃って、大戦果を上げたって書いてあったけど、違うの？」

「新聞はまるで違っている。ハイラルに出張した時、現地へ視察に行つて経験者に色々な話を聞いたが、あの戦は日本軍の惨めな敗北だ。日本軍のほとんどが全滅し、ソ連の戦車の思うがままに蹂躪されたのだ。幸いに戦闘は和睦に終わったが、もし再び戦争をやったら、関東軍などは完全に潰される。今、日本はアメリカとの戦争が取り沙汰されているが、もし始まったら、日本がいかにも努力しても勝つ事はできないだろう。だから、今後日本はどうなるか見当もつかない。俺は兵隊に行つても、幹部候補生の試験は受けず、どこに行つても現地除隊して、日本には帰らないつもりだ。だから、後のことは敏夫に頼むから親の面倒をよく見てやってほしい。」私は兄の言うことがよく理解できず、黙つてうなずいた。

兄はあちらこちらの知り合いを尋ねて回つて挨拶をした後、12月1日、近所の人々の見送る中で出征した。

それからしばらくして、運命の12月8日を迎えた。

その日は朝早くから、けたたましい音でラジオから流れ出る臨時ニュースや軍艦マーチに目を覚まされた。

「帝国陸海軍は、本8日未明、西太平洋に於いて、アメリカ・イギリス軍と戦闘状態に入れり。」

ついに始まった。兄の言った通りだ。これからどうなるか判らない。両親も入隊した兄の事を心配して、色々話し合っていた。私は朝飯もそこそこに学校へ行くと、同級生も皆、興奮して騒いでいた。晴れ渡った青空には、日本軍の戦闘機が何機も全速力で飛び回っていた。

まもなく朝礼が始まり、校長の戦争に対する生徒達の心構えに関する訓辞と、軍事教官からの、今後は毎日ゲートルを巻いて登校する事、帽子は戦闘帽、学生服は詰め襟をやめ、普通の襟に替えた国防色の物とする事等の指示がなされた。

また街ではその日から灯火管制が始まり、電灯に黒い覆いをいつも掛けておき、外灯や広告塔は全て消灯させられた。そして、すべての生活物資が配給制度となり、厳しい統制が始まった。上からの伝達事項は、すべて新しく組織された隣組を通じて行われ、食料等の配給もすべてここを経由するようになったので、何もかも反対する事ができなくなった。しかし、この頃は後から考えると、まだまだ物資が豊富で、闇のルートからは何でも比較的安く手に入った。

それからというものは、ラジオから毎日のように大本営発表の連戦連勝の戦果が、勇ましい軍歌と共に景気良く流れていた。12月も下旬になってようやく兄との面会が許可され、両親は豊橋の工兵部隊を訪問した。兄は両親に対して次のように言った。

「入隊してまだ日が浅いが、普通と違って上官がとても気を使って、優しくしてくれているから、おそろく、まもなく外地に行かされるものと思われる。色々な情報によると、その場所はどうも南支那の広東付近らしい。アメリカと戦争が始まったが、今度は今までと違って、敵機の襲来もあると考えられるので、気を付けるように皆に言ってほしい。」兄には全ての事が予測出来ていたようだ。

そして年も改まり昭和17年となった。

ラジオからは依然として景気のいい勝利のニュースが続けられ、香港陥落、シンガポール陥落、フィリピン占領と続き、日本が負けるなどという事は、夢にも考えられない状況だった。普段の生活も、今までとあまり変わる事もなく、戦争をしているとの感じもあまりなかった。兄からの手紙では広東付近へ行つて、色々訓練を受けた後、今度はスマトラ島のパレンバン付近に移動になったことを知らせてきた。家族の者は戦争が終わった所ばかり移動していて、兄は運がいいと言っていた。

だがその年も半ばを過ぎた頃、ミッドウェー沖の海戦で、敵の空母その他を多数撃沈したが、日本側もよく知られている「赤城」その他の空母が沈没したとの発表を聞き、何か不安な気持ちに襲われた。それからは、今までのような派手な大本営の発表は少なくなってきた。

その年も終わりに近づいた頃、新聞でガダルカナル島の日本軍の活躍ぶりが報道されたが、そこで発表された隊が兄の所属している「岸隊」と書いてあったので、兄の部隊はガダルカナルで戦っているらしいと皆で話し合った。しかし昭和18年になると何かニュースでの発表の歯切れが悪くなり、2月にはガダルカナル島からの日本軍の撤退が報じられた。この「撤退」という表現は、誰の耳にも不可解な感じを与えた。はっきり言えば、「負けた」ということではないかと言う人も多かったが、そんなことはない、作戦

の必要性からで負けたのではない、と言う戦争協力派の人々の声に押されて、皆それ以上のことは言えなかった。だが、この時が日本敗戦の始まりだったのである。

月も過ぎて6月頃になったある日、朝のラジオニュースと新聞でガダルカナル島における大量の戦死者の発表があった。それは静岡連隊から出征した人達だったから町中大騒ぎとなった。学校でも朝礼で軍事教官の訓辞の後、戦死者に対する冥福を祈るために、全員上半身裸になって、約4kmの田舎道を駆け足させられた。それから3日間は、連日戦死者の発表が続いたが、特に兄の事については何も情報がなかったので安心していたら、次の日に、新聞社の人々が家に来て、父に兄が戦死したので写真を貸してほしいと言ってきた。父は驚いてそんなはずはないと文句を言って帰したが、まもなく市役所の人々が来て、兄の戦死の公報を伝えた。私が家に帰った時は、親戚の人達が家に集まっていて、白布を掛けた机の上に兄の写真を飾って、お線香を上げていた。私は姉から戦死を聞かされたが、どうしていいのかわからず、黙ってボーッとしていた。

翌日の新聞には、名古屋師団の他の部隊関係で、静岡出身のガダルカナル島戦死者の発表があり、兄の名前も発表された。父は葬儀屋を呼んで色々と祭壇の準備を行った。祭壇は五段の幅の広い白布で被われたもので、葬儀屋の特別サービスで、色々な仏具が並べられていた。その日からは、新聞を見た親戚や知人が入れ替わり立ち代わりやって来て、お線香を上げて行った。大東亜戦争が始まって以来、初めての静岡での大量の戦死者で、日支事変が始まった時の、戦死者発表の時と同じように、町中は喪一色に包まれた。公共機関や学校では弔旗を掲げ、全ての人が戦死者の家の前では最敬礼をした。戦死者に対する供養のため、その証明書が発行され、食料品その他の配給品についての特別の便宜が計られた。家では夜遅くまで出入口を開け、道を通る人の全てが出入口の前で立ち止まり、最敬礼して行くのを家の中から頭を下げて答礼した。私も狭い家の中で外からよく見えるから、何となく恥ずかしい思いで落ち着かなかった。

この時初めて知った出来事があった。戦死の公報が有ってから数日後のことだった。初めて見るとどこかのおばさんが、若い綺麗な眼鏡を掛けた娘さんを連れて、お悔やみに来た。父が挨拶をして、どちらの方か尋ねたところ、そのおばさんは、工業学校の兄の同級生の母親だった。父親が病死したために工業学校電子科は中退したが、昔から兄はよく遊びに行き、出征前もほとんど毎日のように来ていたそうだ。そして、その友人の妹と仲良くなっていて、将来結婚して、もし必要とあれば、どこかの外国へでも出かけて一緒に暮らせるように、色々な事を勉強していた。しかし、このたびの戦死の報を聞き、その妹さんは大きな打撃を受け、もうこの世に未練はないと家に書置きをして、死を覚悟して家を出た。幸いに、数日後、身内の者がやっとのことで見つけ出し、家へ連れ戻したとの事だった。初めて聞いたこの話に、私達はただただ驚き、父も何一つ口を挟む事が出来なかった。娘さんは絶えず目にハンカチを当てて、泣き続けた。本当に戦争というものは、残酷だと思った。

それから1か月位たった頃、豊橋の連隊で慰霊祭と遺骨の引き渡しが行われた。私は期末試験と同じ日で、出掛けることはできなかったが、両親と姉は豊橋へ行った。私は静岡駅まで、親戚の人や、知人及び町内の大勢の人達と共に出迎えに行き、兄の英霊の名前が入った大きな白旗や、兄の遺骨や写真を先頭に立て、100人位の隊列を組んで家まで戻ってきた。そして、その翌日は葬式を行ったので、私は学校を忌引き休みにした。葬式の後、父は遺骨の箱を親戚の人達が見守る中で開けてみた。噂話によれば、兄の隊は全滅したので帰還した者はいないとのことであったから、どうして遺骨があるのか不思議だった。だが遺骨箱の中身は、想像したとおり何もなく、わずかに途中の島で行った慰霊祭の弔慰文の写しと、その時の墓標を焼いた木炭の一部が入っただけだった。それではあまりにも惨めだという事で、母が保管しておいた兄の「臍の緒」を、一緒に骨壺に入れて墓に埋めた。菩提寺は今まで定めてなかったので、近くの春日町にある日蓮宗安立寺に申し込んで決めた。戦死であったために寺の方でも特別な計らいをしてくれ、墓地は特別に安くし、戒名は最高の居士の法名がつけられた。

葬式の後、父は国から頂いた色々な葬儀のための御下賜金を使って立派な仏壇を購入し、終戦後、金に困って売却するまでの間、玄関の狭い二の間に安置してあった。

私が4年生になって間もなく（昭和19年）、時局はいよいよ厳しくなり、日本軍はじわじわと後退を続け、フィリピンへもアメリカ軍が上陸した。これに伴い徴兵延期の学生に対する延期打ち切りと学徒出陣が始まり、一般の学生に対しては、学徒動員令が下った。そして、工業学校でも電気科以外の4・5年生は4月から直ちに、付近の軍需工場へ配属された。私達電気科の学生は無線関係の技術を急いで習得する必要から、1学期の間は、特に技術を主にした勉学1年分を詰め込み教育され、2学期から学徒動員で工場生産に協力することとなった。当時、戦局は空軍力の優劣に関わっており、中でもレーダー等の無線の技術がアメリカ、イギリスにかなり劣っていることは、電気関係者の間では誰も知るところだった。

学校では時局が切迫して来たので、各学級で主任教師が海軍の予科練とか兵学校、陸軍の士官学校等の

受験を勧めた。私にも一応意思を聞いてきたが、「私は将来、海軍の技術将校になりたいと考えています。」といって、断った。先生は「君の所は兄が既に戦死しているから両親が離さないだろう。」といって、それ以上は何も言わなかった。しかし、後で聞いたところでは、このようなことは全ての学校で行われ、学校によっては断ることが出来ず、泣く泣く志願した者が多かったということだった。幸い私達の学校は工業学校だったから、強要はされなかった。

私達が学徒動員に出かけることが決まったのは9月初めで、行き先は富士の東芝電気だった。私達は毎日朝早く起きて、静岡駅に集合し、東海道線に乗って皆と色々話しをしながら工場へ通勤した。休みは2週間に1回の割で、遠くの者は会社の寮に寄宿した。

最初に課長の指導で理論的な説明を受けて、単球の短波用のモニター受信機（短波放送受信用ラジオ）を作らされた。夕方になると調整中の受信機から外国の短波放送が聞こえてきた。原則としてはあまり聞かないようにして、もし聞いた場合でも、よそでその話をしないよう言われていた。スピーカーから流れる流暢な日本語のニュースは大本営発表と極端に異なり、他の人に色々聞いてみると、どうもこちらの方が本当に近いということがわかり、がっかりした。フィリピンでは日本軍が徹底的に敗北し、インドではインパール作戦で日本軍が敗走を続けていると放送していた。いったい日本はこれからどうなるのだろうか。だんだんと食料も乏しくなり、毎日の配給だけではとても足りないの、母は田舎へ買出しに行った。こんな食糧事情では、日本は負ける事はなくても、勝つ事も無いだろうと思われた。友人達は相次いで海軍予科練習生とか、海軍兵学校へと志願して入隊した。その都度、私達は皆で軍歌や、当時流行った「予科連の歌」や、「明日はお立ちか」とか、「ズンドコ節」などを、街頭で肩を組みながら大声を出して歌いまくった。今考えると、当時はまだまだ戦争というものの本当の恐ろしさとか悲惨さが皆わかっていなかったのだ。

昭和19年の11月になったある日、急に空襲警報が鳴り、敵機の来襲が告げられた。外へ出て空を見上げると富士山を背景にして、点のように小さく見えるアメリカ軍のB29大型爆撃機の描く、白い飛行機雲が青い空にはっきりと見えた。しかしこの時は、別に爆弾を落とすこともなく、日本軍の高射砲もまったく見当違いの方角に撃っていたが、もちろん届かなかった。このしばらく前に、サイパン島がアメリカ軍に占領されたので、ここに飛行機の基地を作って飛んで来たと思われた。B29は富士山の真上で転回して東京の方向に飛んで行った。この日を境に1週間に1度、空襲があるようになった。来る時はいつも富士山を目標にして来るようで、毎回、頭の上を飛んで行ったが、我々にはまだ攻撃をしてこなかった。

それからしばらく経った12月8日の大詔奉戴日（太平洋戦争が始まった1941年12月8日が「開戦記念日」であることから、毎月8日にあわせて国を挙げて戦意高揚を図る目的で始まった国民運動。「大詔」とは12月8日の開戦に際し天皇から発せられた「宣戦の詔書」を意味している）の事だった。その日は、午後が軍事教練の日で、私達工業学校の4・5年生は、全員工場の広場に集まって教練の開始を待っていた。そしてやや遅れて来た大坪教官がやもら号令を掛けようと、高い壇の上に上がったその瞬間だった。教官は急にふらふらとよろけたと思うと、壇上から下へ落ちてしまった。私達はびっくりしたが、普段は威張ってばかりいる教官が、無様な格好をしたので、おかしくなって皆笑い始めたその途端、急に体全体がふらふらと揺れだし、地球が回る目が回るというように、全員が腰を抜かしたように大地にへたへたと座り込んでしまった。

「地震だ。大変だ。」と皆騒ぎ出した。何処から聞こえて来るのか轟々という地響きが聞こえてきた。屋外だったので、落下してくる物は心配なかったが、もし地割りが生じたらどうしようと考えた。この時の地震は大分激しいものだったが、特別な被害もなく無事にすんだ。しかし、電話による連絡では、清水付近で倒壊した家屋が多数生じているとの事で、家の方は大丈夫か皆で心配していた。そして業務終了後急いで汽車に乗ったが、汽車の到着が地震の関係で大部遅れた。その汽車が清水付近を通る時に徐行運転となったので窓から外を見ると、巴川沿いの家は川の堤防が崩れて、無惨にも多数の家が全壊していた。その数は相当の数で、後でわかったが清水の友人数人の家は、気の毒にも全壊していた。このため、当番を決めて翌日からは、許可された数人の者が後片付けの応援に行った。そして、汽車が草薙を過ぎた頃、汽車が徐行し始め、停車した。車内は灯火管制の為、電気を消して真っ暗になっていたの、皆不安の気持ちでいた。すると、車掌の車内連絡があり、ただ今空襲警報が発令された。そして追いかけるようにして、敵機来襲の声と、B29の爆音と、遠くでなる半鐘の音が聞こえた。それとほとんど同時に、あまり遠く離れていない所から火の手が上がるのが見えた。

「空襲だ。気をつけろ。」という声が飛び交った。私達は初めてのことで不安にかられつつも、目と耳を両手で塞いで小さくなっていた。しばらくするとB29の爆音も聞こえなくなり、汽車はそろそろと動き出した。やがて汽車が静岡の長沼辺りに近づくと、数軒の農家が炎上しているのがよく見えた。この頃か

ら東京周辺の爆撃が始まり、毎週1回、週末の昼頃に大挙してB29が来襲するようになったが、これに対して日本軍の反撃はほとんどなかった。

このようにして昭和19年も終わり20年に入った。正月とはなかったが街にはもう見世物小屋もなく、夜になっても明かりも見えないので、出歩くこともできず、その上食べる物も少なく、どこの家でも寂しい正月を迎えていた。私は正月と言っても休みでないで、毎日東芝へ通っていた。私は上級学校の浜松高等工業（この時から浜松工専と名前を替えた）を受験するつもりで勉強していた。しかし、規則により官立上級学校を受験する事ができるのは、工業学校の場合は生徒数の10%以下となっていたが、学校の成績順では今までに努力した生徒が気の毒だということで、特別に選抜試験が行われることとなった。これは各クラスにて行われ、試験成績の上位5名が選ばれた。幸い私はトップで選ばれた。

浜松工専の入学試験は2月の下旬に行われた。この月の下旬に浜松は地震に襲われた上にB29の空襲を受け町の一部が廃墟と化していた。試験は学科試験と口頭試問だった。学科は国体の本義等の時局を踏まえたものが多く、一般科目も国語や生物が主で、工業学校出身者には不利だった。しかし、口頭試問は専門の電気に関するものが多く、東芝でも教えられていたものが多いので、完璧な出来で担当の先生は感心して驚いていた。最後に動員先を聞かれ、東芝だと答えたら、それでよく知っているのだと言って、次の人は数学の質問に切り替えたとのことだった。

卒業式は4年生と5年生が合同して行われた。まず、校長の時局の要請に答えた訓辞の後、優等賞状の授与が行われた。各クラスから2名ずつが選ばれて表彰を受けた。私も選ばれて表彰されたが、心臓が早鐘のようにドキドキと鳴っていた。副賞として書籍の授与があったが、現物が不足していたので代わりに現金が五円与えられた。次に皆勤賞と精勤賞の表彰があったが、私は精勤賞の表彰を受けた。これも副賞が写真帳とあったが、現金で与えられた。私は思いがけない収入が入ったので、帰宅途中に映画館へ立ち寄った。

その後、私はまだ学校が始まらないので、4月から近くの長沼にある工場で、現在は航空機の計器製造工場の東京計器になった旧三光紡績へ学徒動員で行くこととなった。仕事は経験なく何もできないので、仕上がった計器の内部を洗油で洗浄する仕事を命じられた。そして毎日通って働いていたある日、突如空襲警報が鳴り響いた。私達は急いで外の防空壕に向かったが、その時、間を置かず敵機来襲の大声が聞こえ、B29爆撃機の爆音が響いて来た。皆は「工場が狙われるぞ。山へ逃げた方が安全だぞ。」と言いながら、北側に隣接する谷津山を駆け上った。私も皆の後をついて行った。途中で誰かが「爆弾が落とされたぞ。気をつけろ。」と叫んでいるのが聞こえたので、山の斜面に身を隠して空を見上げると、数編隊のB29が1000m以下の高度まで降りてきて、銀色に輝く爆弾らしき物を落とすのが見えた。爆弾は落ちて来るに従って「ヒュー！ヒュー！」と耳を切り裂くような大きな音を上げ始めた。私の心臓は張り裂けんばかりに高鳴ったが、頭上遥か上の方を通り過ぎて行くのが見えたので、ほっとしながら、爆弾の落ちる先を目で追った。すると爆弾は2kmほど南にある三菱飛行機の工場に全弾命中して、地を揺るがすような大きな爆発音と共にすさまじい土煙が空高く上がり、工場の姿が全く見えなくなった。煙が収まった跡には、工場の建物が完全に消え去っていた。

「大分ひどくやられたぞ。きつと大勢死んだぞ。」と、誰かが話しているのが聞こえた。私はそれを聞いてはっとした。その工場には姉が学徒動員で働いているのだった。後で家に帰ったら、姉は無事に帰ってきて、その時の事を色々話してくれた。それによると、今日は朝出勤した直後に、学徒全員が集められて、工場幹部より話があった。それによると、先日愛知県の飛行機工場でB29による大爆撃があり、学徒動員で働いていた学生の大部分が爆死した。このような被害を二度と起こさないために、緊急に避難訓練をせよと軍から命令があり、学生及び工員はただちに日本平の山麓付近へ退避訓練をすることとなった。そして、工場幹部以外の者はすべてこれに参加した。ところが、避難を完了した直後に、今度は本物の空襲警報が出たので、全員がそのまま待機していた。本当に工場が爆撃され、工場幹部以外の人は全員助かった。工場へ帰って色々調べてみると、幹部の人達は大きな防空壕に隠れていたが、爆弾が壕に命中してバラバラに吹き飛ばされて全員死亡した。建物や機械は手も足も出ないくらい目茶苦茶に破壊され、連絡のあるまで自宅待機せよと言われて、帰ってきたとのことだった。

そんな事があった後、浜松工専から通知があり「4月10日に入学式を行う。なお、浜松在住以外の者については入寮させるので、前日までに寮に入るようにせよ。」と言ってきた。私はさっそく先生に申し出て、動員先の三光紡績を辞め、支度を整えて、浜松市広沢町の工専の隣にある至誠寮に入寮した。

私は毎日の激しい労働で、いつも腹を空かせていたので身体に力が入らず、家から持って来た食パンや、煎り豆を節約して食べていた。そんな毎日を過ごしていた頃のこと、たしか4月29日の天長節の日だったと覚えているが、特別な用事もないので、寮の中で本を見ていた時だった。突然、空襲警報が鳴り出

したので、慌てて防空壕へ飛び込んだ。空はどんよりと曇り何一つ見えなかったが、敵機来襲の連絡が遠くから聞こえてきたと思ったら、聞き慣れたB29の爆音がグングンと唸るように聞こえて来た。その音から察すると相当多数の敵機が来たようだ。「気を付けろ！」と、壕の中で上級生が叫んだ途端、少し離れた方角で爆弾が落下する「ヒュー！ヒュー！」と言う音が聞こえたと思ったら、「ズシン！ズシン！」と腹に響くような地響きが聞こえてきた。私は「あっ！爆弾が落ちた。」と感じて、慌てて両手で自分の耳と目を押さえた。爆弾の音はだんだんと近づいてきた。しかし、至近距離に落ちた様子はなかった。だが、街中には無数の爆弾が落とされたようだった。

敵機は1時間程度、波状的に爆撃した後、次第に遠ざかっていった。急いで外へ出て見ると、浜松市の繁華街の方角にもくもくと黒い煙があがっていた。火事は少なかったようで、火の手はあまり見えなかった。繁華街では大きな火事は発生していなかったが、ところどころで小さな火がくすぶり、多数の家は完全に破壊し尽くされ、広い範囲の建物が全壊していた。そして所々に直径10mくらいの大きな爆弾の破裂した穴が空き、現在でもまだ土煙が一面に舞い上がっており、埃っぽい臭いが町中に充満していた。

ふと気がつくと、目の前を担架に乘せられた国民服姿でゲートルを巻いた負傷者が通り過ぎた。「あっ！」と思わず声を出しそうになった。その負傷者はよく見ると、首の所が綺麗に切断されて、消えて無くなり、切り口にはいっぱい血管が吹き出していた。生まれて初めて見た首なし死体に声も出しえなかったが、人の世の無常が強く感じられ、全身から力が抜けていくような気持ちがした。

寮に帰って、そのことを人に話す事もできずにいたら、残っていた者の話では、先ほど、町中の方へ上級生の指示で様子を見に行った者が、途中で爆弾の直撃を受けて破壊された防空壕の中から、呻き声が聞こえてきたので中を覗いて見ると、男か女かわからない一人の人間が、壕の梁に太股を挟まれて苦しんでいるのが見えた。さっそく上級生がスコップで周りの土を掘って広げたが、なかなか取り出せないの、挟まっているその人の太股の皮をスコップで叩いて切った。それと同時に「うーん！」と言ってその人はぐったりとした。ただちに胸に手を当ててみたが、もはや心臓は止まっていた。それで諦めて皆、帰ってきたとのことだった。その時居合わせた学生達は、その日は晩飯が喉を通らなかったと話していた。

ああ、空襲とはこんなにも残酷なものなのか。

それからしばらくたった5月20日の事だった。その日は朝からどんよりと曇り、何かこの間の爆撃の時を思い出させるような陰気な雰囲気だった。私達は朝、学校へ行って授業の始まるのを待っていたが、急に警戒警報が発令されたので、様子を見るためにしばらく待機させられた。ラジオの情報では、敵機の大編隊がこちらに向かって遠州灘を北上しているとのことだった。警報はただちに空襲警報に切り替わった。私達寮生は、どうせ今日は授業がなくなるだろうと、寮の方へ帰って、靴を履いたゲートル巻の姿のまま廊下で横になっていた。しばらくすると、敵機来襲の合図があり、同時にB29の鈍い爆音と、爆弾の落ちる「ヒューッ！ヒュー！」と言う音が聞こえてきた。その音の距離感から、あれっ、今日はこの辺りがやられそうだと感じた。私は慌てて反射的に飛び起き、防空壕へ入った。

「今日はこの近くが狙われているぞ。皆気を付けろ。」と皆と話し合っていると、その言葉通りに爆弾は段々と近くに落ち始めた。寮の賄いのおばさんと、その子供も慌てて私達の防空壕に飛び込んできた。皆、防空頭巾を被り、両手で耳と目を押さえ、軽く口をパツクリと開けて下を向いていた。爆弾の破裂音は次第に激しくなり、その振動は内臓を痛いくらいに強く揺り動かした。壕の中は爆弾が落ちるたびに、大波に揉まれる船のように左右に激しく揺れた。20～30mの至近距離で爆発した感じで、バリバリという建物が叩き壊されるような音がしたと思ったら、空からバラバラと雨のように木片が降ってきた。この防空壕は入口にまだ蓋がないので材木の一部が壕の中まで落ちてきた。入口付近にいた寮の賄いの家族は、ペッタリと顔を地面につけて、頭の上で両手を合わせていた。私は薄目を開けてそれを見て「ああ。これでとうとう最後を迎えるのか。」と思ったが、なぜか経験がないので死ぬ恐ろしさが襲って来なかった。爆弾は立て続けに至近距離に何発も連続して落ちた。どのくらい時間が経ったのだろう。何か周囲が真っ暗になってきたような気がする。頭の中はぼんやりして何もわからない。何かが焼けているような臭いが一面に漂ってきた。寮のおばさん達は「このままでは死んでしまう。遠くへ逃げよう。」と言って、我慢し切れずに外へ飛び出して逃げて行った。外へ出たらかえって危ないのにといいながら、誰もがそれを黙って見送っていた。しばらくして、激しかった爆弾の破裂音は、段々と遠く小さくなってきた。ああ、命が助かったらいいとわかった、頭の中がしっかりしてきた。そしてB29の爆音が遠ざかるのを感じずや、急いで壕の中から外に飛び出した。

外は土煙が立ちこめ、狭い道を挟んだ隣の工專の建物は真っ赤な炎を上げて勢いよく燃え、その熱気で顔がかっかと火照った。上級生の「皆、早くバケツで寮の塀に水を掛けろ。」という声を聞いて、私達は用意してあったバケツに隣接している浜松一中のプールの水を汲んで、一生懸命、火に一番近い位置にあ

る寮の建物の壁に、水を掛けた。焦っているのもあまりうまくは掛からなかったが、それでも全面に水が掛かって、水蒸気ももうもうと立ち上がった。燃えていた建物は、瞬間に焼けて崩れた。カナメモチの生垣は、幸いに火に強く燃え上がらなかったのも、熱気は止まり延焼の恐れはなくなった。

四方を見渡すと、見える限りの広い範囲が綺麗になくなっていった。後で聞いた話では、今回の爆撃目標は、浜松工専で電機研究所を破壊することだったと言われる。私達の電気通信科は電機研究所の関連施設だったので、完全に破壊し尽くされていた。幸い教室に残っていた同級生や先生達は、地下の音響実験室の防空壕に逃げ込んだが、爆弾が落ち始めた時、ここは狙われているから抜け出して遠くへ逃げろ、という先生の指示に従って遠くの方へ逃げて命が助かった。

そして6月も半ばになったある夜の事だった。その日も、昼間の労働の疲れと空腹でぐっすり寝込んでいた。突然、真夜中に空襲警報のサイレンが、けたたましく鳴った。私はびっくりして飛び起き、慌てて暗い中で服を着て、ゲートルを巻きながら、雨戸を開けて見て驚いた。飛行機の爆音は小さくしか聞こえなかったが、浜松市内の寮から離れた位置にある市街地外周地区の約半分が、すでにB29の焼夷弾爆撃によって、激しく燃え上がっていた。私達は急いで防空壕に避難した。その直後、空に大きな爆音を上げたB29が、超低空で侵入し、線香花火を空から捲いたように火の粉を散らしながら、焼夷弾を投下した。同時に焼夷爆弾も落としたらしく、「ヒュー！ヒュー！ザー！ザー！」と夕立が降り出したような激しい音をたて、さらに時々爆弾の爆発音が聞こえた。壕からそっと外を覗くとあちらこちらで、下した焼夷弾が燃え出しているのが見えた。私達は上級生の指示に従って、片端からバケツの水をかけて、火を消した。若い人手が多かったのも、瞬間に火事の危険は去った。隣の浜松一中でも、海軍の学校の生徒が大勢宿泊していたので、屋根の上に無数に落ちた焼夷弾を、完全に消し止めた。さらに今度は、一般民家の方向から燃え上がった火の手が寮に迫ってきたので、一軒手前の家で火を食い止めるべく、上級生の指示に従って、その家の外回りの塀を押し倒して水を掛け、さらに寮の外壁に水をバケツで掛けた。しかし、迫ってくる火の熱気はすさまじく、水はどんどん蒸発して行った。そのうちに煙で呼吸が苦しくなってきたので、地上に這いつくばるような格好をして呼吸をしていたら、何とかしのげた。迫っていた火はやっとのことで皆の努力で消し止めた。

敵機は数機ずつに編隊に分かれて、超低空から波状的に襲ってきた。そのため敵機は物凄く大きく見え、飛行士の顔が見えるのではないかと思われるほどだった。頭上に来た敵機は、次々と火の粉を撒き散らし、その火を先端に付けた断面六角形の筒型をした焼夷弾を1m四方に1個の割合で空から降り注いだ。そして時々、焼夷弾を束ねている鉄板製のバンドが落ちてきた。

地獄の劫火を思わせるような凄惨な状態が約2時間続いた後、やっとなで敵機は去った。

東の空が白んできて、長かった夜が明け始めた。一応外へ出て寮の回りに異常がないか調べていたら、玄関の横に蓆を掛けた物が置いてあったので、何かと思って傍らにいた寮生に聞いて驚いた。実は空襲の最中、寮の前を幼い子供を背負って、全身血だらけになった小学生くらいの子供を抱えた母親らしい人が通った。その女の人は寮の前で立ち止まり、背負っていた小さい子供を、紐を外して放り出した。そして、もう一人の子供を抱えて、急いでどこにもなく走り去った。寮生がそれを見て声を掛けて見たが、女の人は振り返りもしなかった。よく見ると、捨てられたその子は、頭が焼夷弾の直撃を受けたらしく、無惨にも頭が目茶苦茶に潰されていた。いくら何でもそのままでは気の毒だと、皆で蓆を上から掛けてやったのだとのことだった。私はそれを聞いて、手を会わせて押したが、中を見る勇気は出なかった。街の方角を望んで見ると、辺り一面見事な焼野原で、コンクリートの建物以外は何一つ残っていなかった。

それから3日後、静岡と豊橋が同じように焼夷弾爆撃を受けた事が報じられた。ああ間に合わなかったかと思ったが、家族が無事かどうか心配だった。その夜は静岡の方角の空が真っ赤に染まっていた。こんなに離れた浜松からでも火災が感じられたことから、ひどく爆撃されたのだと思った。

私達静岡出身の者は、ただちに支度を整えて汽車に乗ったが、静岡が近づくにつれて、周囲が煙に包まれてきた。そして市内の至る所で火災を生じているのが見えた。汽車は極端に徐行しながら、静岡市の市街地に入って行った。駅の手前1kmの地点まで来ると汽車は急に停止した。それを見て隣にいたおじさんが、「静岡駅が燃えているぞ。静岡で降りる者はここで飛び降りた方がいい。」と言ったので、もっともだと考えて、そのおじさんに荷物を持ってもらって、窓から飛び降りた。おじさんは親切に後から荷物を外へ放り出してくれた。私はお礼を言って、急ぎ足で自分の家の方へ向かった。後で考えたら、父に買ってもらってまだ一度も使用してない洋傘を汽車の中へ置き忘れてきた。物資の不足している時のこととて誠に残念だった。私は家への道を探しながら、周囲の焼け跡の惨状を見て歩いた。まだ遠くが霞むほど煙っていたが、鰯を焼いている時のような臭いが満ち満ちており、あちらこちらに焼けて棒杭のようになった人間の死体が、無数に転がっていた。手足の先の方は先に燃えきったのか、骨が飛び散って丸くなっ

ていた。中には小さな子供の死体と大人の死体が焼けてくっついていたのもあった。家への道は大体の感で歩いていった。音羽町の家近くに来ると、その付近だけが一部焼け残っていた。ほっとして家に入ると、両親や姉が無事な姿を見せてくれた。よかった。よかった。本当によかった。とお互いに喜び合った。

7月の下旬になるとアメリカの機動部隊が日本の太平洋沿岸地区に接近し、関東地方の水戸や日立地区を艦砲射撃した後、遠州灘の方へ移動してきた。

そのころ学校では、構内整理の仕事も一段落して、焼け残った教室で半日程度の授業が行われた。私達の動員は7月下旬と正式に決定し、浜松の三方ヶ原の陸軍航空分^{ぶんしやう}廠へ行くこととなった。私は寮を出ていくので、衣類等の準備との名目で、家に帰ることが許可され、静岡へ帰った。そして家でゆっくり休養して、両親が準備してくれた食料を荷物に入れ、7月31日の夕方、再び浜松の寮へ戻って行った。航空分廠への動員は8月1日だった。午後10時を過ぎた頃、突然空襲警報が鳴り出したので、またかと思って電気を消して外へ出ると、B29と違うアメリカ軍の大型機の比較的低空を飛ぶ鈍い爆音が聞こえてきた。敵機は何回も頭上をぐるぐる回ったあと、照明弾を投下した。周囲は一面に照らし出されて一瞬昼間のようなになった。照明弾はゆっくりと飛行場と市街地の間に落ちて行った。それからの1時間くらいというものは、入れ替わり立ち代わり敵機がやって来て、常に2機ないし3機が頭上を旋回していた。妙な行動をしているなど皆と話し合ったその時、海の方角がピカッと光った。そして追い駆ける様に遠雷のような音が聞こえた。しばらくすると、その方角から花火のような赤や青の火の玉が、「ヒュルヒュル」と唸りながらこちらの方角に飛んできて、どこかへ落ちて爆発音がした。

「艦砲射撃だ！皆防空壕へ避難しろ」という上級生の声があったので、慌てて全員防空壕へ逃げ込んだ。壕は少し前に屋根と扉を完全に修理して、入口には分厚い扉がしっかりとついていて、人数が多いので満員になっていた。初めのうちは扉を開けて外をきょろきょろと伺っていた。海から射撃して来ているのは三方向で、艦砲の弾丸は赤や青等色々な曳光をひきながら、3連射ずつ2～3分ごとに交互に撃ってきた。そのうちに段々と艦砲の弾着点が近くなって来たので、皆、壕に隠れてじっとしていた。やがて至近距離に落ち出したので、両手で耳と目を押さえて軽く口を開けていた。そのうちに艦砲の弾着点が次第に至近距離になり、爆発の振動は一段と強烈な物となった。壕の中は荒波に揉まれた船のように激しく左右に揺れ出し、艦砲の爆発した破片が大気を切り裂くような鋭い音を立てながら、無数に飛び交った。ああ、もう駄目かと思って力が抜けて来た時、一番入口に近い所にいた寮生が、「危ないから、皆もっと中の方へ詰めてくれ。」と言ったので、無理をして中の方へ詰め込んだ。その1分後「ダダーン！」と凄い音と振動がして、「ピューン！バラバラ！」。それに続いて「ブスッ！」と扉を突き刺すような鈍い音がすぐ近くでした。「あれっ！何か飛び込んだぞ。」と一番入口の所にいた者が言った。彼は何やら、もぞもぞと身体を動かしていたが、やがてその飛び込んだ物を見つけたらしく、「あっ！艦砲の破片だ。まだ熱いぞ。もう少し早く飛び込んできたら、俺の身体に突き刺さっていたな。危なかったなあ。」と言った。それから長い時間、艦砲弾の爆発音とその破片が空中を飛び交う音が聞こえていたが、段々と音が遠ざかり、2時間程過ぎた頃、砲撃は止んだ。

しかし、敵機は相変わらず頭上を飛んでいたのも、また砲撃が開始されるおそれがあるぞと考え、上級生の指示で、寮の全員は駆け足で少し離れた坂道を下った崖に掘ってあった横穴式の防空壕へ避難した。

1時間位経った頃、学校の用事で東京まで行っていた寮生達が帰ってきた。その者たちの報告によると、汽車が浜松駅に着いた時、上下2本の列車が同時に到着し、わずかに先に入った上り列車の乗客は一早く駅前の1000人くらい入れる大防空壕へ避難した。遅れて入った下り列車の乗客は、もはや壕がいっぱいで中に入れず、仕方なしに線路のかたわらに身を伏せていたが、無数の艦砲の破片が空を飛び交って、とても身の安全は確保出来ず、あちらこちらに隠れながら寮まで駆け足で逃げ帰って来た。帰る途中、駅前を通り過ぎる時に見たものは、艦砲の弾丸が、駅前防空壕の両側出入口及び中央部の3ヶ所に完全に命中して発生した、数百人と思われる人々のバラバラ死体だった。真に身の毛もよだつ感じだったが、危険で救助する余裕もないので、仕方なくそこを通り過ぎて帰ってきたとの話だった。後で聞いた話だが、その時少し離れた所にある至誠寮の外寮の防空壕にも艦砲弾が直撃し、中に入っていた5人の寮生は全身をバラバラに碎かれて即死した。翌日、残っていた寮生が総動員で後始末をしたが、誰も1日中食事が喉を通らなかったとの事だった。私は学徒動員で翌日朝出発したので、それには加わらなかった。やがて東の空が薄明るくなった頃、もう大丈夫だろうと、横穴防空壕から寮へ帰る途中で見たのは、隣の浜松一中の校庭に深さ10m直径20m位の3発の大きな艦砲弾による穴だった。後で聞いた話では、艦砲は大きさが郵便ポストと同じくらいで、破壊力は普通の250kg爆弾と同じとのことだった。そして付近一体の至る所に、無数の斧のように両側が刃の形になっている弾丸の破片が散らばっていた。その破片は大多数が5cm角

くらいの大きさだった。もしこれが人に当たったら、見事に肉体を切り裂くだろうと思えた。そしてその数と分布から見て、もし壕に入らずに外に出ていたらどこにいても、身体に突き刺さったと思われた。

8月1日は朝早くから、艦載機が連続して波状攻撃を掛けてきた。今日は動員に行く日だ。皆に別れを告げて、動員に行く電気通信科の一年生の寮生数名は、共にリヤカーに布団その他の荷物を乗せて集合地の学寮へ向かった。集合時刻は午前9時だったが、正午を過ぎても何の連絡もなく、午後6時頃になってやっとで出迎えの2名の下士官が、ガタガタのトラックを運転してきた。皆は急いでその車に乗って、三方ヶ原の飛行場の方向へ行った。薄暗くなった頃、三方ヶ原小学校へ到着した。そこで初めて知って驚いたことには、我々は半分以上の者が徴兵猶予の年代の学生であるから、全員下士官待遇として、今日から陸軍航空部隊に入隊させ、通信隊に編入するとのことだった。

8月6日、私達は作業が完了した通信用電線の最終チェックを下士官と共に実施するために、トラックに乗って北の方へ向かった。気賀町の郊外に到着した私達は、ゆっくりやってみようとの下士官の言葉があったので、皆裸になって、近くを流れている太田川で水泳をしてしばらく遊んだ。そして、そろそろ始めようとの下士官の指示に従って、仕事を始めたが肝心の電話がまったく通じない上、交流のハムのような雑音が大きく入るので、不良箇所を探してあちらこちらと歩き回った。しかし発見する事ができず、そのうちに日もとっぷりと暮れて、辺りは真の闇に包まれた。出迎えのトラックも来ないし下士官も帰る道がわからなくなり、星を見ながら見当をつけて歩いて行ったら、飛行場の周辺のような所へ出てきた。その時、どこから出て来たのか、数人の男が私達の周りを取り囲んだ。飛行場周辺には朝鮮人が大勢住んでいて、日本人に暴行するから近寄らない方がよいとの注意を受けていたから、事によるとそれではないかと緊張した。その時、下士官がつかつかと前へ進み出て、私には全くわからない言葉、感じでは朝鮮語らしい言葉で相手に話し掛けて居た。5分くらい話した後、周りを取り囲んでいた男達は黙ってどこことなく去って行った。下士官が戻って来たので、何を話したのかと尋ねて見たら次のように語ってくれた。「あの連中は半島生まれの朝鮮人です。我々がもし内地の兵隊だったのなら、叩きのめしてやろうと出て来たのだそうです。実は僕も半島生まれだから、朝鮮語でその旨を話し、一緒にいるのは浜松工専の学生であって兵隊ではないと説明したら、理解して帰る道を教えてくれた。」ほっと安心して、また、皆で疲れた足を労わりながら暗い夜道を歩き続けた。幸いに途中で家路へ帰る牛車と会い、わけを話して皆乗せてもらった。小学校へ戻ったらもう10時頃になっていた。帰ってみると珍しく連絡用の教室のスピーカーからラジオが鳴っていた。よく聞いてみると、広島で皇族の宮様が戦死したことを話していた。なぜかと思ったら、広島は新型爆弾の投下により、大きな被害を生じたとの説明がなされた。何のことも全くわからないので、周りの友達に訪ねたところ、次のような驚くべきことが分かった。

本日朝方、アメリカのB29数機が広島に侵入して、原子爆弾を投下した。この爆弾はウラニウム爆弾とも称し、原子分裂を利用したもので、1発で広島市が吹っ飛んだ。そして住んでいた人間は、皆、皮膚が馬鈴薯の皮のようになると剥け、特に近くにいた者は蒸発して消えてなくなった。これに対する対策は、白い物を被って深く掘った横穴式の防空壕に避難するしかない。だがこれで助かるかどうかはよくわからないとのことだった。この情報は友達の一部の者が、通信連絡所の業務に携わっていたので、そこで得た軍情報を一緒にいた連絡兵が教えてくれたものだった。このウラニウム爆弾の事は工業学校の生徒の頃、朝日新聞の少年版に最近の兵器の事がわかりやすく出ていたのでよくわかったが、この新聞では今、世界各国が、この研究に力を入れており、最初に発明した国が世界を制覇するだろうと説明されていた。ああ、これで日本も駄目かもしれないと思った。

それから3日後に今度は長崎に原子爆弾が落とされたと報じられ、力が抜ける思いだった。どうせ、これで終わるのだったら、もう一度家へ帰って両親の顔が見たいと思うようになり、どういう理由で帰ろうかと毎日考えた末、11日に監督の先生に思い切って申し出た。

「寮から直接動員先に来たために、着替えの衣類を十分に準備してなかったので家へ帰って持ってきたい。ついては帰省を許可願いたい。」と実はここへ来る前に同じ目的で帰省したのだが、嘘を言ったら、何の疑いもなく許可が出た。翌12日にさっそく浜松駅まで約10kmの道を歩いて、汽車に乗って静岡へ帰った。家では無事に帰って来たので皆一安心した。そしてその翌日13日、一緒に動員に行った友から頼まれた手紙を持って、友の家を訪ねた。その時は友の父に会えなかったが、夜になって、その父親がわざわざ訪ねてきて、次のような事を言った。

「実は差し出がましいことを言うようだが、私は新聞社に勤めている関係上、色々な情報が入ってくるのです。今度の戦争は2～3日中に終わるらしいという事を伝え聞いている。もちろん日本は降伏するのだが、その後どうなるのかわからない。だから貴方はこのままここにいて戻らない方がいい。帰ったらどんな事をされるかわからない。この情報は確実なものと思われるので、あえて知らせに来たのです。もち

ろん家の息子の事も心配ですが。」これを聞いた私は大変驚いて、どうしたら良いか判らなくなり父にも相談したが、とりあえず2～3日様子を見ようという事となり、14日に帰る予定を変更した。

14日の夜は夜半から激しい雷雨があった。その中で、空襲警報が鳴り響きB29一機が来襲した。敵機は何かを落としたらしく、落下音が聞こえたが、それは爆弾ではなかった。父は町内の警防団長だったので、町内の見回りをしていたが、途中で慌ただしく家へ戻ってきた。その手には一枚の広告のような紙が握られていた。

「敏夫、こんな物をB29が落として行ったぞ。」と言って、父は私にそれを見せた。それを見て私はびっくりした。それはアメリカの宣伝用の広告で、中に書いてあったのは、天皇陛下が人力車にアメリカのトルーマン大統領を乗せて走っている漫画だった。そして、そこに書いてある説明文によれば、日本政府は天皇制の存続を条件に、ポツダム宣言を無条件にて受け入れる事をアメリカに申し入れて来た。トルーマン大統領はこれを承認すると書いてあった。すべてが昨日、友人の父から聞かされた通りだった。

その翌日の8月15日は朝からよく晴れて気持ちの良い日だった。ラジオでは朝早くから正午に天皇陛下の玉音放送があるので、国民は全て聞き漏らすことのないように、と繰り返し何回も放送していた。私はついに日本は無条件で降伏するのかと複雑な思いだった。どうなるかわからないが、いったんは動員先に帰った方がいいと考えて、浜松へ戻る支度をした。正午になると、予定通りラジオから玉音放送が聞こえてきた。その内容は何となくわかり難かったが、続く情報局総裁のコメントで、今まで聞いていた通り、日本は敗北したことがわかった。しかしラジオでは「敗戦」という言葉は使わず、代わりに「終戦」という言葉を使用していた。ラジオ放送も終わったので、私は支度を整えて静岡駅に行った。浜松駅に着いたのは午後8時を過ぎていた。重いリュックサックを肩に背負い三方ヶ原小学校への道を、重い足を進めていった。小学校へ着いたのはもう10時過ぎで、全員暗い教室の中で寝込んでいた。私も教室の隅に布団を敷いて寝た。

朝になり、周りにいた友達に15日の様子を聞いた。玉音放送は皆でラジオを聞いて、もう戦争は終わったのだからと、仕事をせずにいると隊長の少尉が来て「まだ戦争は終わっていない。我々陸軍は全て徹底抗戦をする。弱腰の中央政府は敗戦の指令を出したが、我々は最後の一人になるまで戦う。まだ航空機は無数にある。アメリカ軍などは物の数ではない。君達も我々と協力して戦ってもらいたい。」と言って帰っていった。その頃から、上空には今まで隠して有った日本の色々な種類の航空機が数多く飛んで、宣伝ビラを撒いていた。しかし、実の所どうしたらいいかわからないので、皆外に出ずにいたとのことだった。そんな事を話していたら先生が来て皆をそっと集めて、次のように指示した。

「日本は戦争に負けた。これからどうなるかわからないが、とにかくアメリカ軍が上陸して来て、日本全土を占領するだろう。日本軍が支那にやった事を考えると、まず女は皆、捕まえて強姦し、男は皆、去勢して奴隷としてこき使われるだろう。しかしその前にここにいると、強行派の将校が来て戦争に駆り立てられて玉砕させられるだろう。だから皆は急いでここから帰って、身を潜めているのが良いだろう。後の事は私が学校へ帰って報告し、必要が生じたら、また各人に連絡するから、今日中に皆、家へ帰りなさい」と言って、汽車に乗るための旅行証明書を皆に配った。

9月も半ばになった頃、学校より通知が届いて、授業の開始を知らせてきた。

※ 著者、前島敏夫のその後

昭和22年3月、浜松高専を卒業し京都大学へ進み、同大学を卒業後は関東電化工業(株)へ入社。群馬県渋川市へ。結婚し家族ができ、昭和47年一身上の都合により同社を退社。妻の実家がある群馬県前橋市へ。(株)群馬環境技研(現・株環境技研)で退職を迎え、以降のんびりとした老後を過ごす中、70代の頃『轍の跡』を著した。85歳で認知症を発症。後半生は幸せな暮らしののうちに、令和3年、92歳で天へと召されました。